

11 月に入り、卒業後の就職先が決まって少し落ち着いたと思ったが、修士学位論文の執筆に追われ、新たな繁忙期を迎えていた。

学業面

就職活動のため、修論の進捗は遅れ気味であったので、11 月以降は完全に論文執筆に没頭してきた。

この時期は、論文を書き進めるにつれて参照する書目が増えてきたが、本を借りられなかったことも多かった。新型コロナ対策で図書館の開館時間が短縮され、以前は開館時間でもあった週末に閉館されたためだ。さらに、研究室の暖房設備が一年で最も寒いこの時期に故障してしまい、メンバー全員がダウンを着たまま足底にカイロを貼って論文を書くことが弊研究室ならではの風景となっていた。

就活期間の面接を振り返ると、最もよく聞かれたのはチームでの経験であった。社会において、最も重視されるのはチームワークだと思っているが、大学院で研究は 1 人の戦いである。大学院に在籍中には 1 人の戦いをする孤独を実感したが、この孤独が満ちている環境下において全身全霊で一つの事に献身することの充実さを実感した。

11 月と 12 月は忙しさの波が訪れつつある 2 ヶ月だったというならば、1 月は怒涛のような 1 ヶ月と表現しても過言ではなかった。修論は月末の締め切りに迫る一方で、入社手続きや入社課題もどんどん舞い込んできた。昼間に入社関連の対応をし、夕方以降になってやっと論文に手を付けることが多々あった。締め切りに間に合わせるため、1 日のノルマを終えて家帰れたかと思ったら徹夜明けの朝だったということも数えきれない。このような生活が 3 週間続いていると体調を崩したことに気づいた。しかし病院に行くとは貴重な半日を失ってしまう、そう考えた私は少し無理をして研究室で作業をし、病院で診察を受けることは論文提出後まで我慢した。提出まで残り 2 日となった時、帰宅もせず、睡眠もとらずに論文の最後の仕上げとして 120 個余りの脚注を一つ一つ確認し、最後の最後まで論文の完成度を高める努力をしていた。そしてこれらの努力の結果が実り、論文は無事に学務宛に提出することができた。研究指導をしてくださった先生からは論文の出来が良かったのか、数年後に博士課程として大学で研究しないかとお誘いもいただいた。先生からの親身な添削および期待のメールで、自分が抱えていた不安定が一気に吹っ飛び、これまで研究を頑張ってきてよかったと感じた。

就職活動のため、他の学生より短い時間で論文を書かなければいけなかったにもかかわらず、他者の倍の努力をして先生のお墨付きをいただいた論文を書ききることが出来たとき、私はこの 1 人の戦いに勝利したと心の中で確信した。

生活面

研究活動に浸かった3ヶ月だった。

研究の苦勞の感嘆が絶えない日々、研究室で修論を書く仲間がお互いの癒しであった。

まるで戦友のようであった。みんなそれぞれ異なる「戦場」に居たが、お互いの処遇と心境をお互いがよく分かりあい、支えていた。研究方法を共有したり、悩みに耳を傾けたりや、いつの間にか雪が降っていた夜には一緒に外に駆け出して雪を楽しんだり、クリスマスや正月の時に研究室で鍋をしたり会食を開いたりなど、全てがかけがえのない貴重な思い出となった。また、研究の合間に一緒に未来を想像したり、卒業旅行のプランを立てたりしていた時には、今の研究をもっと頑張ろうと思えた気がした。大学院卒業後はみんなそれぞれ世界中に散らばっているかも知れないが、この逆境でも共に前に進んできた思い出はすでに私たちの一部であり、いつでもどこでも私たちを繋ぐ宝物だと思う。

修論を提出した現在は少し休憩をしているが、まもなく修論の口頭試問を迎える。

私の人生における学生としての最後の試験となると思っているので、全力を出して悔いのないような学生生活のピリオドを打ちたい。また偶然にも、口頭試問当日は中国の歴における元日となっている。1年の最初の日に行われる口頭試問ではミスのない完璧な回答をし、清々しい新たな1年を始めたいと思う。



深夜まで研究室で論文を書く光景
気づいたら研究室では自分1人きり
になってしまった。



研究室で徹夜明けの朝。
京大前にある、暁の下の百万遍



京都の初雪。
この幻想的な風景に癒され、研
究の悩みを一時的に忘れること
ができた。

最後に、この1年間、経済面および生活面において公私を支えてくださった日中友好協会の皆さんに感謝を伝えたいと思う。この奨学金制度のおかげで、金銭の心配をせずに就職活動にも研究活動にも集中することができた。それだけでなく節日があるたびに事務局の方から暖かい祝福の言葉をいただいたり、コロナの状況が厳しくなるたびに心配の言葉をいただいたことに心より感謝したい。

学生期間の終わりは社会人としての新生活の始まり。

社会人になる前に学生気分を抜け出さなくてはならないが、学生時代に培ってきた精神を忘れず、これからの人生でも頑張りたい。